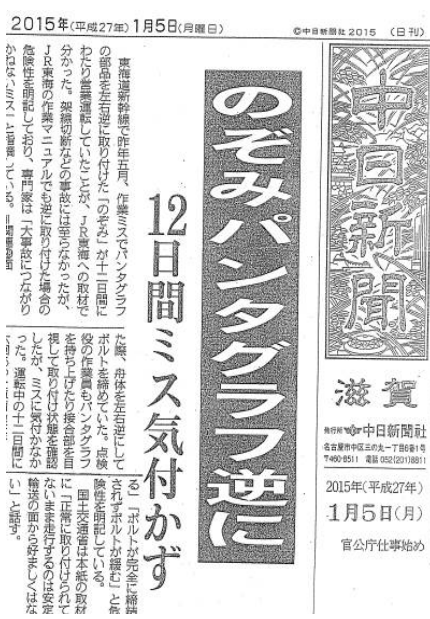


パンタ逆取付け！ 再発防止対策を求める「声」！

今年になってパンタグラフの「誤取付け」とされた問題を多くのマスコミが取り上げました。単純に作業者の責任論を書いている記事もありますが、パンタグラフ舟体が逆に取り付けることが可能であり、その状態のまま12日間も発見されずに営業運転をしていた事実を警鐘を鳴らす記事も少なくありませんでした。

私たちは、この問題を昨年開催された業務委員会の中で会社と議論してきましたが、全てを作業者の責任にして、状況の説明や現場写真すら明らかにしなかった会社の姿勢は絶対に許せません。

1月25日の中日新聞に掲載された記事「警告」は、まさしく私たちの訴えてきた内容と一致する記事でありました。



警告

正月の名古屋駅は多くの乗客でごった返していた。中でも四日の東海道新幹線上りの利用者は三十一万四千人に達し、JR発足以降、最多となった。

今や私たちの生活になくはならない新幹線。その信頼を支えてきたのは高い安全性だろう。にもかかわらず、

昨年五月、パンタグラフを逆に取り付けたまま、「のぞみ」が十二日間営業運転していた。気にかかったのは、過ちが分かった後のJR東海の対応だ。

JR側は「担当者の問題

内堀 外堀

であり、会社の対策に問題はない」とする。「人は過ちを犯す」という前提に立れば、ヒューマンエラー防止に終わりはしない。ましてや、社内文書で部品脱落の危険性まで指摘するほどの重大な過失だった。

新幹線の安全神話は、先人たちの不断の努力によって築かれたはず。「再発防止策を見直す必要なし」と判断したJR東海に不安をぬぐえない。そこに安全に対するおごりはないのか。いま一度、今回の過ちを「警告」として、かみしめてもらいたい。(中沢誠)

中日新聞 二〇一五年一月二十五日